Journal of The Human Development Research, Minamikyushu University 2023, Vol. 13 ,63-67

報　告

特別支援教育研究室（本田研究室）との共同研究について

本田　和也
田實　美幸*
上田　淳子*
中村　舞子**
（* 学校法人天竜学園　天竜幼稚園　** トイロ）

本年度，特別支援教育研究室（本田研究室）は，認定こども園の「学校法人天竜学園天竜幼稚園」と児童発達支援事業所の「トイロ」と共同研究を行った。それぞれ,「保育という立場」と「療育という立場」からお願いした。

天竜幼稚園は，南九州大学人間発達学部の開設当初から,「連携学校園」として実習校園として連携を図っていただいている。トイロは，昨年度，実施した都城市と曽於市，南九州大学との間で「都城地域障害児支援専門性向上研修事業」に参加していただいた。

共同研究の主な方法としては，保育・療育場面をビデオ録画し，そのビデオを観ながら実践を振り返り，反省等を保育・療育に生かしていくというものである。本稿では，この共同研究の実践について報告する。

I. 認定こども園との共同研究

学校法人天竜学園天竜幼稚園　田實 美幸
学校法人天竜学園天竜幼稚園　上田 淳子

はじめに

本園は幼稚園型認定こども園として０歳児から６歳児までの保育・教育を実施している。その中で本園と療育施設の並行通園をしている子どもが、４名いる。他にも集団生活の中で困り感を感じていると思われる子どもが増えている状況があり、職員も保育の在り方や個別の支援について試行錯誤している。

このような中、南九州大学の本田和也先生に共同研究のお声をかけていただき自立活動を踏まえた保育・療育のあり方について１年間研究させていただいた。

１．研究のねらい

特性を理解し、対象児が集団生活に適応できるように保育のあり方について考えていく。またティームティーチングの良さを生かした保育を目指すというものである。

２．研究の内容

３歳児クラスに在籍するＡ児を対象としビデオによる保育分析を本田先生ご指導のもと行った。

一斉に行う机上での活動を分析していくことでＡ児の変容や担任の保育のあり方、補佐の先生とのティームティーチングのあり方の実際を報告する。

３．研究の実際

＜活動報告＞

６/13（月）製作あそび（腕時計作り）―腕時計のベルトに飾り付けをしよう―

ハサミの使い方を確認し、シールを切り、ベルトに貼る。

（担任の工夫した点）

・導入時に 何を作るのかな？ と注目できるように宝箱から腕時計を出し、活動への期待を高める。
・ハサミを初めて使う子どももいたので「グーパー」の声掛けをしながら開け閉めをする。
・シールには切るところに目印をつけておく。

（Ａ児の様子）

席が一番後ろだったこともあり離席し、前のほうへ来る。宝箱に興味を示すものの、すぐに自分の興味のある出席ノートや虫かごで遊んでいた。

しかし、話はよく聞いており指示された用具を自ら取りに行く姿が見られた。ハサミで切ったりシールをはがしたりする際は、補佐が個別に援助する。

（見取り）

待つことが苦手な様子である。

（補佐の関わり）
　A児の席近くにいて製作の手順を個別に伝えたり、出来たことを十分に認めたりして、喜びにつなげるようにしていた。
（本田先生との振り返り）
　離席をしたり違う事をしたりする様子をどこまで認めるか、どのように援助していくのか担任と補佐が話し合う必要がある。

８／２（火）月刊絵本を見よう
　教師の近くに座り、教師の絵本をみんなで見る。
（担任の工夫した点）
・気づいたことや知っていることなどが、発言できるような雰囲気を作り、受け止めていく。
（A児の様子）
　友達が口々に発言するため、騒がしくなり耳を塞ぐ姿が見られた。
（見取り）
　音や感覚が過敏である。
（本田先生との振り返り）
　教師が一人一人に目配せしすぎたり、受け止めたりしすぎるため、それぞれが発言しており、友達の話を聞いていない。今はこの子の話を聞いているということを言葉や仕草で知らせるなど、発言する際の交通整理が必要である。また、静かになる間の取り方を心がけると良い。そうすることで、友達の意見を聞く姿へつながる。
　子どもの発言を復唱してあげると、聞くことが弱い子には、聞きやすい。

９／９（金）祖父母プレゼントづくり
　自分の顔を画く。洋服に模様付き折り紙を貼る。
（担任が工夫した点）
・子ども達が意見を言う際は、その子の目を見て、一人だけが発言する場を作る。
・間を取り、静かな瞬間を作り出す。
・手順や必要な道具は、文字と実物を使って伝える。
・認めたり、共感したりする時は、その子と目を合わせて、言葉や身振りで伝える。
〇補佐と本児への関わり方について話し合う。
・本児が立とうとした瞬間に止める。
・注意が反れる時には、指差しして視線を向け、大切なことに注目できるようにする。
・一緒に遊んで、信頼関係を築く。
（A児の様子）
・離席が減り、製作の手順など話に耳を傾ける時間が長くなってきた。
・製作や、絵を描くことが好きで、意欲的に取り組む。
・教師と目が合うことが増え、出来た作品を自ら見せにくるようになった。
（見取り）
　意見を言う場面で担任が交通整理をしたことで、内容が伝わりやすくなり、理解や意欲が高まり、みんなと一緒に活動する楽しさを感じている。
（本田先生との振り返り）
　発言する場で、交通整理をすることによりA児のみではなく、クラス全体が、友達の話に耳を傾けようとするようになった。
　今後は、A児の座席を中央にし、担任との距離を近くにして、物理的環境も整えてみる。

10／17（月）SIあそび（知能刺激あそび）をする。
　斜線の中に隠れている動物を見つけ、答えのカードを貼る。
（担任の工夫した点）
・A児の席を前方の中央にする。
・導入では、視覚教材を使って注目できるようにする。
・ホワイトボードや教師の机の上に不必用な物を掲示したり、置いたりしないようにする。
（A児の様子）
・担任と視線がよく合うようになり、自ら「先生」と呼ぶことが増えた。
・友達と１つの物を共同で使えるようになる。
・よく考えて集中して取り組む時間が長くなる。
・発表したくて前方へ離席するが、席に座ったら発表できることを伝えると着席する。また、発表することで、満足する。
（見取り）
・約束事を守るなど、みんなと一緒にしようとする気持ちが芽生えている。
・成功体験が自信へとつながっている。
（本田先生との振り返り）
・決まりは守るように導いていく。
・姿勢が崩れる時には、気を引く声かけや、遊び心のある声かけも効果的である。
・共同注意が大事である。

12/21（水）ゆらゆらダルマを作ろう
（担任の工夫した点）
・導入で大型絵本「だるまさんがころんだ」を読む。その際、リズムをつけて読んだり、ゆらゆらダルマが出てくる仕掛けを作ったりして、注目できるようにする。
・作る手順を掲示して、活動に見通しが持てるようにする。
（A児の様子）
・自分の思った事、感じた事を積極的に発言する。
・離席をしても「座ってくれますか？」の声かけに「はい」と反応して座る。
・友達と一緒に絵本を見たり、会話をしたりすることを楽しむ。
・手順表を見ながら進める。また、自分の描きたい表情や模様が描けるようになる。
・「先生見て！」と自分の作品をアピールする。
・指示を聞き逃す場面があり補佐が個別に伝えるが、納得いかない様子が見られる。（両面テープで貼るところを糊で貼る。）
（見取り）
友達の様子をよく見て、自分で何をすべきか気づけるようになっている。
（本田先生との振り返り）
・自分で出来ることが増えているので、本人に任せても良い所と、援助が必要な所を見極めて補佐していく必要がある。
・補佐は友達とつなぐ役割も担うと良い。
・感覚過敏（靴下やシューズを履かない）は、１、２カ月で軽減できる。履かせる習慣をつけると良い。

〈A児の成長〉
・言葉が不明瞭であったが、友達の言葉を聞いたり、会話したりすることにより、語彙力が増え発音も不明瞭さが軽減している。
・手順表を見て、見通しを持てるようになり自分で行えるようになったことが増えた。
・離席が減り、教師と目が合うようになったり、自己アピールしたりするようになった。
・苦手なことも「やってみよう」「頑張ってみよう」という気持ちが芽生えてきた。
・自分の作品を認められ作る楽しさや、描く面白さを味わい、遊びの幅が広がった。
・靴下、シューズが履けるようになった。

〈担任の学び〉
・特性を受容しすぎてしまっていたことで、特性を強めてしまっていた。分かりやすい言葉、しぐさ、表情、視覚的教材、座席などの工夫により自分で出来ることが増える。
・また、工夫によりクラス全員の分かりやすさにつながったり、意欲的に楽しく参加したりする姿へとつながった。
・支援の前にまずは、信頼関係を築くことが大切である。
・補佐の先生と、どんな育ちを願っているか、どこまでどのように援助していくかを十分話し合う必要がある。
・ビデオ分析を通して、自分の保育を見直すことができた。また、的確な助言をいただき保育の質向上へとつながった。

４．成果と課題

〈成果〉
集団生活において、みんなと同じようにしない、理解していない、意欲がないなど表面的な部分だけを見て、個別に支援する必要があると思っていた。しかも、子どもが困り感を感じていると、いかにも分かったように絵カードや仕切りなどを使用して個別支援をしているつもりであった。それでも効果がないと、「困った」「難しい」で立ち止まっていたように思う。その子のことを思っているという気持ちだけは強くあると自己満足していたようにも感じる。また、今の一場面のみに対する援助であったのではないかと振り返る。

実際、靴下やシューズを履かないことも嫌なのだろうと見逃してきたが、感覚過敏は軽減できることを教えていただき、繰り返し履く必要性を伝えながら、履くように援助してきたところ１カ月後には改善されていた。履くことが望ましいので、履くように指導していくことが大切だったのだと分かった。

今回、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し自立を図るために必要な態度や習慣などを育て、心身の調和的発達の基礎を培うようにすることを目標にした自立活動を踏まえて、保育をすることが大切だと知った。

まずは、合理的配慮の前に、ユニバーサルデザインの保育（基礎的環境整備）の必要性を強く感じた。本研究を担当した担任は、ユニバーサルデザインの保育を行う保育力を身につけていたので、

意識して教材準備、保育を進めることにより、対象児の成長が目覚ましく見られた。また、担任以外の声かけには反応しない様子が顕著にみられ、信頼関係を築くことが大前提であることも証明されたように思う。

また、ティームティーチングについても考えさせられた。関わり方によっては、逆効果になってしまうこともあるので、担任と補佐の共通理解を図ることが必要だと感じた。特に展開や活動内容、、個別目標を考えたＴＴの指導・支援内容の確認が不十分だと、必要のない支援で子どもの気付きや問題意識、動きを制約したり、教師の役割や責任が分散したりすることがあるので、注意が必要であることが分かった。

今回の研究を通して、対象児のみではなくクラス全体の子どもの育ちが感じられ、日々の保育のあり方についても考えさせられた。

〈課題〉

園全体で自立活動を踏まえた保育・療育のあり方を考えていきたい。その為には、まず園長や主任がリーダーシップを図れるように、理解を深め職員の指導をしていく必要がある。指導方法としては、やって見せることが大事であると学んだので自分自身が実践したり、今回担当した担任のように保育力を備えた職員をモデルとして、保育を公開したりビデオ分析をしたりしていきたい。

まずは、ユニバーサルデザインの保育を行えるように、幼稚園教育要領を読み合わせ、教育の基盤となる部分から学びなおしていきたい。そのうえで、自立活動についての知識も少しずつ増やしていきたい。

園内だけではなく、療育施設や大学の先生方にも積極的に助言をいただきながら、子どものよりよい成長に向けて取り組んでいきたい。

図１　保育の様子

II. 児童発達支援事業所との共同研究

トイロ　中村 舞子

はじめに

この共同研究を通しての事業所の変化や私自身、管理者として気づいたことが３つある。

・環境設定の変化
・子どもたちに対しての職員の関わり方の変化
・職員に対しての声のかけ方やモチベーションのやり方

についてである。この３つの点に基づいて報告する。

１．環境設定の変化について

初回のときは、朝の会時の子どもと子どもの距離が離れすぎており、離席する子や朝の会に参加できない子が多くいた。本田先生からの、

・距離を近くする
・職員が子どもと子どもの間に入る
・主になる先生が子どもたちとやり取りできる距離を作ること。常に同じ距離でなくてよい

というアドバイスをいただき、すぐに職員と朝の会の流れをシミュレーションした。

絵本の見せ方、角度を普段の先生たちが行っている形をしたことで、見えていない子や見えにくくなっている子がいることを実際に先生たちが体験することで分かりやすくなったようだった。先生たち自身が、主の先生の位置、子どもたちの配置を考えるようになってきた。そして、実践していき環境設定を子どもたちに合わせるようになった。

ここで私は、今まで振り返りなどでは、「そこでは、こういう対応の仕方が良いのかも」、「このやり方でしてほしい」など支援に対しての答えややり方を直接伝える、または、「考えてください」など、投げてしまうことが多かった．実際に子どもたちの立場になることで、職員も１番理解しやすいということに気づいた。どうしても私たちは、

子どもの立場を考えているようで、考え切れていない場合が多い。そのときには、子どもと同じ経験をすることで先生たち自身が気づいてくれるということを私自身が感じることができた。

2．子どもたちに対しての職員の関わり方の変化について

お集まりなど、大人しか理解できない“言葉”を使う職員が多かった。例えば､｢先週｣､｢この間｣､｢昨日｣､「一昨日」など時間の流れの表現である。また支援者の「～してほしいなあ」というお願い口調で指示を出していることが多かった。他にも、個別支援を意識してしまい、子どもが発言することをそのまま尊重することが多々あった。

職員と使っている言葉の振り返り、放デイの子どもたちと違うこと、発達に合わせた声かけの仕方ができていないことを伝えた．ここでもまた、実践的に子どもの立場になってもらうようにした。

すぐには、言葉の使い方も改善できていないが意識することで少しずつ子どもに合わせた言葉掛けが出てくるようになってきている。また、お願い口調を「～します｣､｢次は、～です！」というように変えていった。お願い口調は、子どもの中で無意識に､｢しなくてもいい」という選択肢ができてしまうと助言をいただいた。そのことも意識して、お集まりのときや子どもへの指示の出し方を変えていくことで、はっきりとした指示になり、伝わりやすくなったと感じている。

主になる先生、サポートの先生たちも子ども主導になってしまう現状であったが、支援者側が目的をもって接することで子どもたちの動きが統一していき、動きが落ち着いてきている。

3．職員に対しての言葉の掛け方やモチベーションの持たせ方について

先述の２つでも述べているが、子どもの立場になって考えると同時に、わたしたち支援者を指導する側も職員の立場になり、伝えていかないといけないことを考えた。｢子どもたちのために」と、いつも支援してくださる職員の気持ちを尊重しながら、でも､｢伝えることは伝えていく」というのが難しく、考えるのに時間がかかった。本田先生と話し合いながら、方向性を導くこと、目的をどこに持って支援するのか明確にして伝えることの大事さに、気づかされた。

支援者となる職員も子どもを通して、学ばされることがまだまだある。そして、私たち指導者も現場を任せている上での責任として、指導力を身につけていかないといけないと思った。

おわりに

この共同研究を通して、私を含め職員一同、療育しての基本、考え方、療育者としての姿勢を学ばせていただいた。この経験を生かして、これからも子どもたちの支援、サポートをしていきたいと考える。

図２　療育の様子